

旧約聖書における自然と人間

山 我 哲 雄

目 次

- I. はじめに
- II. 神の被造物としての自然と人間
- III. 自然の支配者としての人間
- IV. 自然の中に顕れる神の力
- V. おわりに

I. はじめに

旧約聖書学や旧約神学の研究において、自然と人間の関係をめぐる諸問題は、これまで必ずしも中心的な主題をなしてきたとはいえない。思うにその原因の一つは、旧約聖書中の多くの文書が、もっぱら神ヤハウェとその民イスラエルの排他的関係に関心を集中し、特に「救済史 (Heilsgeschichte)」や「災いの歴史 (Unheilsgeschichte)」という形で、その関係の歴史的な意味やその歴史的展開を叙述の主たる対象にしているからであろう。これに反し、自然はイスラエル民族と神ヤハウェとの特殊な関係には必ずしも直接的な関わりを持たない、普遍的な実在である。自然を前にすれば、イスラエル人であるか異民族であるかという区別は相対化される。マタイ福音書 5:45 の言葉をもじって言えば、「神は、イスラエル人の上にも異邦人の上にも太陽を昇らせ、雨を降らせる」のである。しかも、旧約聖書の中心潮流が、神の意志と行為の表現としての歴史の展開に注目するのに対し、自然は常住不変の時間を越えた存在として、いわば歴史というものを無化してしまう。このことは、旧約聖書の中でも珍しく、しばしば自然というものを正面から見つめた思想家コヘレトに、大きな無力感と空しさを感じさせるものであった。(なおこのことは、コヘレトが、ある意味で救済史が挫折した時代に生きたことと

も関係があろう。)

「太陽の下、人は労苦するが、
すべての労苦も何になろう。
一代が過ぎればまた一代が起こり
永遠に耐えるのは大地。
日は昇り、日は沈み
あえぎ戻り、また昇る。
風は南に向かい北に巡り、めぐり巡って吹き
風はただ巡りつつ、吹きつづける。
川はみな海に注ぐが海は満ちることなく
どの川も、繰り返してその道程を流れる。

.....
かつてあったことは、これからもあり
かつて起こったことは、これからも起こる。
太陽の下、新しいものは何ひとつない」(コヘレト 1:3-7, ⁽²⁾9)

しかしながら、自然というものが、まさにそのような、特定の民族やその歴史を越えた無時間的で普遍的な実在であるだけに、あえて旧約聖書がその自然と人間の関係についてどのように語っているかを考察することは、旧約聖書的な意味での救済史を持たない時代——あるいは、旧約聖書的な意味での排他的な救済史が、もう一つのより普遍的な救済史によって乗り越えられた時代、と言うべきであろうか——に生きるわれわれにとっても、すぐれて今日的な意味を持つのではなかろうか。しかも、われわれは今、まさに自然と人間の関係の問題が新たに問い直されねばならないような時代、文明、社会、自然環境の中に生きている。旧約聖書が自然と人間について語る発言の中から、この問題を考え直すうえで——積極的なものであれ、消極的なものであれ——何らかの示唆は得られないであろうか。⁽⁴⁾

その際に、まず第一に念頭に置かねばならないのは、古代イスラエルの人々が——あるいは、古代人一般がと言ってもよいであろう——、現代の世俗的、自然科学的な意味での自然と人間の関係という観念をまった

く持っていなかった、ということである。彼らにとっては、同時に神との関係を考えることなく、人間についても自然についても考えることは不可能であった。その意味で、彼らはわれわれよりもはるかに「宗教的人間」だったわけである。

第二に、古代イスラエルの人々の神・自然・人間の関係についての理解は、他の古代文明や他の古代宗教におけるそれとは非常に異なるものであったことを銘記する必要がある。エジプト、ギリシア、インド、中国、日本などの古代農耕文明圏では、個々の点での相違はあろうとも、概して、神々や人間などを含め、すべてが大いなる生きた包括的な自然に包み込まれ、その一部をなすと考えられていた。すなわち、彼らの神々の多くは、自然界の諸力を神格化したものであり、人々はそのような自然の神々の大いなる力を賛美し、それに与るために彼らを礼拝した。ここではまた、人間が、自然や、特に他の生物との深い一体感のうちに生きていた。彼らにとっては、神と人間と自然の区別は、いわば相対的なものにすぎなかった。これらは彼らが、自分たちの生命を育む自然のうちに聖なるもの、神的なものを見出していたからに他ならないであろう。

自然を客観的に見つめ、その原理について初めて理論的に考察した、ギリシア哲学の開祖といわれるタレスでさえ、「万物は神々に満ちている」と語ったという。これらの地域に発展した高等宗教においてさえ、人々は自然に内在する究極的な原理を「ブラフマン（梵）」、「タオ（道）」、「ダルマ（法）」、「ロゴス」といった形で抽出して、あるいはそれを体得し、あるいはそれと合一することを希求した。

これに対し、旧約聖書の思想の特色は、神と人間と自然の三者の間に絶対的な区別を置くことにあってよからう。このことは神学的に言えば、三者の間にそれぞれ越えることのできない超越的な関係が考えられているということである。人間は神ではありえないし、また決して神になろうとしてはならない。自然はそれ自体としては神的なものでも聖なるものでもなく、神は決して自然の中には見いだされない。そして、人間は決して自然の一部ではない。そしてこのような区別を曖昧にしたり、それらの境界を乗り越えようとすることは、即、悪であり、罪に他ならないのである。このような見方は、ある程度まで、かつてわが国の哲学者和辻哲郎が『風土』で試みたように、過酷な自然と対抗して生き

る遊牧民を先祖とする古代イスラエル人の生活の特殊性とそれに発する思考様式から理解することができるかもしれない⁽¹⁵⁾。

もちろん、神と人間と自然の間にそれぞれ超越的な関係が考えられていると言っても、それら三者の間の関係の超越性の性格には、さまざまな相違がある。以下では、神や人間や自然についての旧約聖書の諸文書のさまざまな発言を顧みつつ、旧約聖書における自然と人間の関係についての理解の特質を、「神の被造物としての自然と人間」、「自然の支配者としての人間」、「自然の中に顕れる神の力」という三つの観点からより詳しく考察していきたい。

II. 神の被造物としての自然と人間——「地の塵として人間」

旧約聖書において神と人間・自然の関係とは、冒頭の「天地創造」の物語にも端的に示されているように、何よりもまず、創造者と被造物の関係である。

自然と人間がともに神の被造物であるということは、まず第一に、両者が永遠なる神とは異なり、有限性を共有しているということを意味する。有限であり、やがて滅ぶべきものであるという一点については、人間とその他の被造物の間に何ら本質的な相違はない。旧約聖書の著者たちは、人間の無常性を論ずるとき、しばしば自然界の生成消滅を引き合いに出す。捕囚時代の預言者第二イザヤは、人間（ここではイスラエルの民）の無常性と神の言葉の永遠性を対比して、次のように歌う。

「肉なる者は皆、草に等しい。

永らえても、すべては野の花のようなもの。

草は枯れ、花はしぼむ。

主の風が吹きつけたのだ。

この民は草に等しい。

草は枯れ、花はしぼむが

わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。」（イザ 40：6—8）

それどころか、ヨブは、一度死ねば終わりの人間である身を顧みて、

切られたり枯れたりしても翌年には再び芽を吹く樹木の再生力に嫉妬さえする。

「木には希望がある、というように
木は切られても、また新芽を吹き
若枝の絶えることはない。
地におろしたその根が古い
幹が朽ちて、塵に返ろうとも
水気にあえば、また芽を吹き
苗木のように根を張る
だが、人間は死んで横たわる。
息絶えれば人はどこに行ってしまうのか。」(ヨブ 14：7—10)

旧約聖書においては珍しいニヒリストであるコヘレト⁽⁶⁾は、死すべきものとしての人間と動物の同質性を自嘲的に述べつつ、こう嘆く。

「神が人間を試されるのは、人間に、自分も動物にすぎないということを見極めさせるためだ。人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊を持っているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところに行く。

すべては塵からなった。

すべては塵に戻る。

人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。」
(コヘ 3：18—21)

いわゆるエデンの園の物語でも、人間は地の塵から作られ(創 2：7)、やがて地の塵に返るとされる(創 3：19)。「塵」とは無常なもの、無価値なもの象徴であり、「地の塵としての人間」という観念は、被造物としての人間のこの面を象徴するものであると言ってもよいであろう。

「塵にすぎないお前は塵に戻る」(創 1：19)

一般的には、後のキリスト教の原罪観の影響もあって、人間はもともと不死の存在として創造されたのだが、アダムの罪への罰としてはじめて死の宿命が下されたのだと考えられることも多い（ロマ5：12—14など）。しかしこれは旧約聖書の本来の見方ではない。人間はもともと死すべきものとして作られたのであり、アダムへの罰は、（死そのものではなく、）労苦に満ちた生活とエデンの園からの追放に存する（創3：17—24）。しかもその追放は、人間が「永遠に生きる者」とならないように防止する意味を持っているのである。⁽⁷⁾

「主なる神は言われた。『人は我々の一人のように、善悪を知るものとなった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある』。主なる神はエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにした」

（創3：22）

旧約聖書はむしろ、人間が被造物としての有限性の限界を踏み越えて、神に等しいものとなろうと望む傲慢のうちに、人間の最大の罪を見出している（創3：5，6：1—2，11：1—9，イザ14：12—15など）。このような見方は、特に人間が原子核や遺伝子などを操作する力を持ち、いわば「神の領域」に足を踏み入れようとしている現代において、重要な警鐘を鳴らしているものとして耳を傾けるべきであろう。

第二に、世界が神の被造物であることは、創造者である神が自然界に含まれるのではなく、それを超越しているということを意味する。旧約聖書の神は、先にも見たインドやギリシアやエジプトや日本に数多く見られる自然の諸力を神格化した神々のように、世界に内在する神ではないのである。自然はいわば外から造られた「物体」に過ぎないのであり、それ自体で神聖でも偉大な力を持つものでもない。したがって、それを神であるかのように崇拜してはならない。古代オリエン特世界では、特に太陽や月や天体が神々として広く崇拜された。これに対し旧約聖書は、それらもまた神によって造られた被造物であり、それらがいわば、暦を数えるための目印や、地を照らす「照明装置」にすぎないことを強調する。

「神は言われた。『天の大空に光る物があって、昼と夜とを分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ』」(創1:14)。

「目を上げて天を仰ぎ、太陽、月、星といった天の万象を見て、これらに惑わされ、ひれ伏して仕えてはならない。それらは、あなたの神、主が天の下にいるすべての民に分け与えられたものである」

(申4:19)

この点で旧約聖書では、自然の徹底的な「非神話化」、脱神格化が行われている。旧約聖書で偶像崇拜が厳しく禁止されるのも、超越的な神を自然界の一部と同一視することへの反発と無関係ではあるまい。しかしイスラエルの人々も、カナン⁽⁸⁾の沃地に定着して農耕生活に移行すると、しだいに土着の農耕文化の影響を受け、バアルや地母神に代表される自然の豊穡の神を崇拜するようになった(ホセ2:7-15, エレ44:17-19など)。これに対して神の超越性を守るために戦ったのが、イスラエルの預言者たちである(王上18章, イザ44:9-17, エレ2:27など)。

とはいえ旧約聖書は、自然をもっぱら消極的に意味づけているわけではない。それどころか古代イスラエル人は、自然というものの素晴らしさをよく知っていた。ただ彼らは、その素晴らしい自然の背後に、常にそれを造った神の偉大な力を意識していたのである。

「あなたの天を、あなたの指の業を

わたしは仰ぎます。

月も、星も、あなたが配置なさったもの。」

(詩8:4。なお、詩19:2-7などをも参照)

旧約聖書には、後のキリスト教神学でいう「無からの創造(creatio ex nihilo)」の観念はまだないと言われる。天地創造の記述によれば、原初の世界は万物が水の中で未分化、無規定な混沌状態⁽⁹⁾にあった。⁽¹⁰⁾

「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いて

いた」(創1:2)

創造とは、神の言葉によってその混沌(カオス)に時間や空間や生命の秩序がもたらされ、秩序ある世界(コスモス)が成立することである(創1:3以下。神が世界の各部分を「分けた」という記述が繰り返されていることに注意。なお詩74:13-17, 104:6-24なども参照)。創世記1:31によれば、創造された世界は神の目に「極めて良く」映った。それが美しい調和と秩序に満ちているからであろう。

「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。」(創1:31)

ただしギリシアの自然哲学者たちの場合と異なり、古代イスラエル人にとって、世界の秩序は自然の中に内在する法則によるのではない。それはあくまで、創造主としての神の人格的意志に基づくものなのである(「神は言われた。……するとそのようになった」という定形句が繰り返されることに注意)。この意味で、彼らにとって自然は、決して日本語で言う本来の意味での「自然」(ひとりでに、そのようになったもの)ではない。

このような本質的に「良い」世界に、人間は生きている。旧約聖書の宗教は、現にある世界を否定して別の世界に救いを求める現世否定的、彼岸的な宗教ではない。むしろそれは、神によって創造されたこの世界とそこでの生を、唯一無二(11)のかけがえのないものとして真剣に受け止めるように教えるのである。それではその「極めて良い」はずの世界に、実際にはなぜ悲惨な災害や、醜い悪や、理不尽な不公正が満ちみちているのであろうか。この問題については、別の角度から論じなければならない。

III. 自然の支配者としての人間——「神の似姿としての人間」

旧約聖書の世界観では、あらゆる被造物の中で、人間が特別の位置を占めている。すなわち、旧約聖書の見方では、神と人間を含む自然物と

の間に越えがたい深淵があるだけではなく、人間と人間以外の被造物の間にも絶対的な区別があるのである。このことは、人間（だけ）が「神にかたどって」その似姿に創造された、ということに表現されている。

「神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された」(創1:26-27)

人間が神の似姿 (imago dei) に創造されたということの意味をどう解釈すべきかについては、古代から現代にいたるまでさまざまな議論がある。⁽¹²⁾ かつて行われたように、それを人間の靈的性格や理性、良心といったもっぱら精神的な特質に還元してしまうことは適切ではなからう。そこに、文字通り人間の外観が神に似ている (エゼ1:26-28 など参照) という、神話的とも言えるニュアンスが込められていることは否定できない。⁽¹³⁾ ただ、それが形姿のみの問題でも、正確な写実の意味でもないことは、形姿の違う「男と女」がともに神の似姿であるとされていることから明らかである。創世記9:6の記述からは、神の似姿の観念に、今で言う人間の尊厳といった意味が込められていることが分かる。

「人の血を流す者は

人によって自分の血を流される

人は神にかたどって造られたからだ」(創9:6)

このように、神の似姿とは、さまざまな意味を合わせ持った複合的な観念なのである。いずれにせよ確かなのは、それが他の被造物と絶対的に区別された、人間の特殊な地位を表現しているということである。

旧約学で有力な見方の一つに、神の似姿が、神に代わって自然界を支配する人間の特権を意味している、とする解釈がある。⁽¹⁴⁾ 創世記1:26では、人間を神の似姿に創造しようという神の決意に直接続いて、人間を自然界の支配者にしようという神の意向が記されている。

「われわれにかたどり、われわれに似せて、人を造ろう。そして海の

魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」
(創1:26)

新共同訳で「かたどり」と訳された原語「ツエレム」(像/似姿)は、人間の姿を表出した彫像や絵画の意味も持つ(エゼ16:17, 23:14などをも参照)。古代オリエントの大王たちは、自分の支配権を表現するために、領土の国境や遠征先に自分の姿に似せた彫像を立てた。古代オリエント世界において「似姿」とは、支配権を象徴するものでもあったのである。

先に、神の創造した世界への驚嘆について述べたものとして引用した(59ページ)詩編8の続きの部分でも、神が人間を「神にわずかに劣るもの」(すなわち、神に極めて近い存在)として創造し、被造物世界の支配を委ねた次第が次のように歌われている。

「そのあなたが御心に留めてくださるとは
人間は何ものなのでしょう
人の子は何ものなのでしょう
あなたが顧みてくださるとは。
神に僅かに劣るものとして人を造り
なお、栄光と威光を冠としてただかせ
御手によって造られたものすべてを治めるように
その足もとに置かれました。
羊も牛も、野の獣も
空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。」(詩8:5-9)

すなわち人間だけが持つ神に似た(ないし神に近い)特質とは、神に代わって世界を支配するということなのである。

エデンの園の物語においても、植物や動物は、人間のために創造されたかのように描かれている(創2:8-20)。イザヤ書45:18によれば、神は地を「混沌として創造されたのではなく、人の住む所として形づくられた」のである。ここに、人間中心的な自然観があることは明らかである。人間は、神から地上の支配を委任された、自然界の主人なのであ

り、自分たちのために自然を役立てることができる。あえていえば、人間は自然の目的であり、自然は人間が生きていくための素材なのである。ここにも、家畜を飼育することによって生活した遊牧文化の遺産を見ることができるかもしれない。いずれにせよ、人間と他の生き物を絶対的に区別した古代イスラエルにおいては、生きとし生けるものとの根源的な連帯感を前提とする、インドやギリシアにおける輪廻転生の思想や、世界各地の伝説に見られる動物への変身物語は成立のしようがなかったのである。

自然科学思想史研究者の一部には、西欧における科学技術の発達が、自然を純粹の物体とみなし、人間がそれに自由に手を加えることができるとするヘブライズ的な思想の産物だとする見方がある。さらには、科学技術の結果としての現代の環境破壊の責任をも、そのような聖書的な自然観に問おうとする動きがある⁽¹⁵⁾。そのような指摘に確かに当たっている一面があることは、率直に認めるべきであろう。ただし、古代イスラエル人やその子孫であるユダヤ人自身が、自然科学や科学技術を生み出したのでも発展させたのでもないことは忘れてはならない。彼らにとっては、自然への支配権はあくまで神から委譲されたものであり、これから見るように、創造主としての神に対する重い責任を伴うことであった。また、人間が神に取って代われるわけでないことを彼らがよく知っていたことは、すでに見た通りである。西欧の科学技術は、人間を自然の支配者とみなすユダヤの世界観と、ギリシアに由来する、観察と実験に基づく合理的、法則的世界観が生んだ鬼子とでも呼ぶべきであろうか。

旧約聖書で言う人間の自然への支配が、無制限のものでも恣意的で暴君的なものでもないことは、創造された人間に、食べ物として「種を持つ草と種を持つ実をつける草」が与えられたとされること（創1：29）に示されている。すなわち本来は、人間が食べるために動物を殺すことは許されなかったのである。肉食は、人間の腐敗と罪によって洪水が起こされ、最初の人間たちのほとんどが滅ぼされてから初めて許可される。しかしその場合でも、生き物の命の本来の主が誰であるかを忘れないために、血だけは食べてはならないとされる（創9：2—4）。エデンの園の物語でも、人間は（特別に禁じられた木を除き）「すべての木から取っ

て食べ」ることを許可されるが、同時にその直前で、地を「耕し、守る」ことを命じられる(創2:16)⁽¹⁶⁾。したがって、旧約聖書が考える自然への支配とは、人間が利己的な目的のために自然からほしいままに搾取してよいということではなく、いわば羊飼いが飼い主から預かった羊たちを丹精かけて育てるように(創31:38—39など参照)⁽¹⁷⁾、自分に委託された権限の範囲を自覚しつつ、創造者である神の代わりに自然を管理し育成するという、義務と責任を伴うことだったのでないだろうか。

洪水物語(創6—8章)は、人間がその義務と責任を蔑ろにした場合、いかなる結果がもたらされるかを表現している。先に見たように、創造物語では被造物世界が「神はご覧になった。……見よ、それは極めて良かった」(創1:31)と評価されている。ところが洪水物語の冒頭では、まったく同じ文形で、「神はご覧になった。……見よ、それは墮落していた」(創6:12)と述べられ、両者が対比されている。すなわち、「極めて良い」世界に罪と暴虐と混乱が満ちているのは、創造者としての神の責任ではなく、その「支配」を委ねられた人間の責任なのである。ここで重要なことは、人間の腐敗と罪が単に人間自身だけにではなく、自然界全体のうえに破局をもたらすとされていることである。

「すべての肉なるもの(ここでは人間のこと)を終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。」(創6:13)。

そしてその破局は、神によって創造された世界の秩序の崩壊であり、創造以前の混沌状態の回帰として表象されている。すでに見たように、創世記一章では、自然界の創造は、神が水の混沌(「深淵」)を分割し、秩序づけることで始まった(創1:6, 9)。これに反し、洪水とは、そのように神によって秩序あるもの(コスモス)にされた世界が、再び創造以前の混沌(カオス)に逆戻りすることなのである。⁽¹⁸⁾

「この日、大いなる深淵の源がことごとく裂け、天の窓が開かれた」(創7:11)。

より素朴なエデンの園の物語でも、人間の罪の結果、地が生産力を失って「茨とあざみを生えいせさせる」ようになったとされている（創3：18）。預言者たちも、人間の悪が自然界にさまざまな荒廃を引き起こすことについて語っている。

「主はこの国の住民を告発される。

この国には、誠実さも慈しみも、

神を知ることもないからだ。

呪い、欺き、人殺し、盗み、姦淫がはびこり

流血に流血が続いている。

それゆえ、この地は渴き

そこに住む者は皆、衰え果て

野の獣も空の鳥も海の魚までも一層される」（ホセ4：3。なお、イザ24：4—5などをも参照）

それは現代風に言えば、人間の過ちの結果として引き起こされる「生態学的破局」に他ならない。⁽¹⁹⁾洪水物語そのものは、メソポタミアの伝説に由来する神話的なものにすぎないかもしれない。⁽²⁰⁾しかしそれを、人間が自然に対する責任を忘れたときにどうなるかを示す、極めて現代的な意味を持った寓意として読むことも十分可能なのである。

最初人間たちが菜食しか許されず、洪水後の人間が初めて肉食をするようになったとされることには、旧約聖書の語り手たちが、われわれの生きる世界の実情は必ずしも神の本来の創造秩序に適っていない、と感じていたことが示されている。⁽²¹⁾他方で預言者たちは、終末的な（すなわち歴史の終極に訪れる）神の救済の時やメシアの支配のもとでは、原初の世界の理想的な秩序と、人間と自然の和解が完全な形で実現するという希望を語っている。

「狼は小羊と共に宿り

豹は子山羊と共に伏す。

子牛は若獅子と共に育ち

小さい子供がそれらを導く。

牛も熊も共に草をはみ
その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく草を食らう。
乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は娘の巢に手を入れる
わたしの聖なる山においては、
何ももの害を加えず、滅ぼすこともない。」(イザ 11:1-9, な
お、ホセ 2:20-21 などをも参照)。

IV. 自然の中に顕れる神の力 — 「自然における神の栄光」

神と人間と自然の関係の持つ第三の局面は、自然が人間に対し、神の存在やそのすさまじい力を表現する媒体になる場合である。イスラエル人は、人間の力を越えた自然の激動や暴威、自分たちの理解を越えた天変地異のうちに、力ある神の臨在を感じ取った。神とイスラエルの契約に際しては、「シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に下られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた」(出 19:18) とされている。「デボラの歌」と呼ばれる戦いの歌では、神の到来の戦慄的な模様が、次のように歌われている。

「主よ、あなたがセイルを出で立ち
エドムの野から進み行かれるとき
地は震え、天もまた滴らせた。
雲が水を滴らせた。
山々は、シナイにいます神、主の御前に
イスラエルの神、主の御前に溶け去った」(士 5:4-5)

預言者も神の出現を次のような凄まじいイメージで描き出している。

「山々はその足もとに溶け、平地は裂ける
火の前の蠟のように、
斜面を流れる水のように」(ミカ 1:4)

ここで注目に値するのは、ギリシアやインドにけるように、日常的な自然界にはたらく諸力がそのまま神格化されるのではなく、イスラエルの場合には、人間が慣れ親しんだ日常的な自然の秩序を破る自然の異様な動きや変容の中に、理解を越えた神の力と超越的な神の臨在が感じ取られたということである。自然の震撼は、いわば神の出現に伴う随伴現象にすぎず、決してそれ自体が神自身と同一視されることはない。そこでは自然が、いわば超自然的なものの象徴となるのである。このような、自然を変動させる神の顕れを、専門用語で神顕現（テオファニー）⁽²²⁾という。

もちろん旧約聖書の神ヤハウェは義の神であり、罪と悪を罰する神である。また、本稿のはじめにも述べたように、ヤハウェは何よりもまず歴史の神でもあり、そのような神の罰はなканずく歴史を通じて実現するが(王下 17:7-18, イザ 10:1-6 など)、自然界のさまざまな災害も、悪に対する神の罰と見なされている。すでに見たように、ノア時代の洪水は、人類の腐敗に対する神の裁きであった。悪の町ソドムとゴモラは、「硫黄の火」によって滅ぼされ、その跡には(あたかも原爆実験や原発事故の跡のように)あらゆる生命を拒む死海とその周辺の不毛の地ができた(創 19:24)。出エジプト物語によれば、エジプト王がイスラエル人を奴隷のまま止めておこうとすると、さまざまな天変地異が起こってエジプトを苦しめたという(出 7-12 章)。律法は、イスラエルが契約を破った場合、飢饉や疫病やその他の天災が襲うだろうと警告する。

「主は、肺病、熱病、高熱病、悪性熱病、干ばつ、黒穂病、赤さび病をもってあなたを打ち、それらはあなたを追い、あなたを滅ぼすであらう。頭上の天は赤銅となり、あなたの下の地は鉄となる(すなわち、雨が降らず、土地を耕すこともできなくなる)。主はあなたの地の雨を埃とされ、天から砂粒を降らせて、あなたを滅ぼされる」(申 28:22-24。なお、レビ 26:14-39 などをも参照)

預言者たちもまた、旱魃や疫病などの自然の災害をイスラエルの不服従に対する神の罰と見なした。

「わたしはお前たちを黒穂病と赤さび病で撃ち

お前たちの園とぶどう園を枯らせた。

また、いちじくとオリーブの木は

いなごが食い荒らした。

しかし、お前たちはわたしに返らなかったと

主は言われる」(アモ4:9。なおミカ6:13-15なども参照)

他方で、自然法則を破る神の力あるはたらき(すなわち「奇跡」)が、イスラエルへの救いに結び付けられる場合もある。出エジプトしたイスラエル人がエジプト人に追われたとき、神は海を真っ二つに割ってイスラエルを救ったという(出14章)。またイスラエルがギブオンで敵と戦ったとき、神は太陽や月の運行を止めて彼らに勝利を与えたとされる(ヨシュ10章)。これらの例においては、自然界に現れる神の巨怪な力の表象が、罪は裁きをもたらすという倫理的な図式や、イスラエル中心の救済史観と結合され、いわば合理化されていると見なすこともできよう。かつてギリシア哲学の思惟と旧約聖書の思惟を比較考察したトーレイフ・ポーマンは、ギリシア人にとっては「歴史は自然の一部であるがゆえに、彼らは歴史にたいしても自然と同じ方法を適用する」と論じたが、この言葉をもじって言えば、旧約聖書中の天災や自然奇跡についての記述においては、自然が「災いの歴史」や「救済史」の中に取り込まれ、歴史化されて扱われていると言ってもよかろう。

しかしながら、本節の最初に見た神顕現の描写などに示された、自然における神の圧倒的な力の顕現は、より非合理で戦慄的なものを含んでいる。ルードルフ・オットーは『聖なるもの』の中で、聖なるものの本質が、人間とは何ら共通性を持たず、人間の理解をまったく越えた「絶対他者(Das Ganz Andere)」性であり、それに対する人間の原初的の反応は戦慄であると論じている。すなわち聖なるものとは、「戦慄すべき秘義(mysterium tremendum)」⁽²⁴⁾なのである。旧約聖書の神顕現の描写には、そのような意味での「聖なるもの」の本質とそれへの人間の反応が最もなまの形で現れているといえるであろう。この点を特に深く掘り下げたのが、『ヨブ記』の作者である。

よく知られているものであるが、ヨブ記の概略を示せば次のようにな

ろう。「人はゆえなく⁽²⁵⁾神を敬うか」という問題をめぐる神とサタンの賭により、義人ヨブにさまざまな災いが下る。ヨブを見舞いに来た、応報主義的世界観に立つ友人たちは、ヨブに降りかかった災いは彼が犯した過ちに対する神罰であると考え、悔い改めて神の赦しを乞うようにヨブに勧める。しかし、ヨブは自分の義と潔白に固執し、ついには「ゆえなく」義人に災いを下す神の不当性を糾弾し、なぜそのように弱い人間を弄ぶのか、自分にどのような落ち度があったのか、と詰問する。最後（ヨブ38章以下）になってついに神が「嵐の中から」答えるが、奇妙なことにこの神の「答え」は、義人の苦難について質すヨブの問いにまったく答えていない。むしろ神は、逆に、人間の理解を越えた自然界の神秘に関する問いをヨブに次々に投げかけるのである。

「お前は海の湧き出るところまで行き着き
深淵の底を行き巡ったことがあるか。
死の門がお前に姿を見せ
死の闇の門を見たことがあるか。
お前はまた、大地の広がりや隅々まで調べたことがあるか。
そのすべてを知っているなら言ってみよ」（ヨブ38：16—18）

「光が放たれるのはどの方向か
東風が地上に送られる道はどこか
誰が豪雨に水路を開き、稲妻に道を与え
まだ人のいなかった大地に
無人であった荒れ野に雨を降らせ
乾ききったところを潤し
青草の芽がもえ出るようにしたのか
雨に父親があるだろうか
誰が露の滴を生ませるのか
誰の腹から霰は出てくるのか
天から降る霜は誰が生むのか」（ヨブ38：24—29）。

神の語りの後半では、鶉や獅子や野性の山羊やろば、野牛、駝鳥など

の動物たちの奇妙な生態が名人芸的な筆致で描かれる（『ヨブ記』は世界最高の詩文学の一つとしても定評がある）。

「お前は岩場の山羊が子を産む時を知っているか。
雌鹿の産みの苦しみを見守ることができるか。
月が満ちるのを教え、
産むべき時を知ることができるか。
雌鹿はうずくまって産み、子を送り出す。
その子らは強くなり、野で育ち
出ていくと、もう帰ってこない。」（ヨブ 39：1—4）

「駝鳥は卵を地面に置き去りにし
砂の上で暖まるにまかせ
獣の足がこれを踏みつけ
野の獣がこれを踏みにじることも忘れてる。
その雛を、自分のものではないかのようにあしらひ
自分の産んだものが無に帰しても、平然としている
神が知恵を貸し与えず
分別を分け与えなかったからだ。
だが、誇って駆けるときには
馬と乗り手を笑うほどだ」（ヨブ 39：14—18）

ついには「ベヘモット」と「レビヤタン」という怪物たちまで登場する（ヨブ 40—41 章。両者を単なる「かば」と「鱷」と同一視してしまうことは適切ではない⁽²⁶⁾。その細部描写からも分かるように、それらはむしろ、人間の理解を絶した自然の神秘の象徴なのである）。

ヨブはこれを聞いて圧倒され、すっかり打ちひしがれ、おのれの非を認めて神に平伏する。

「それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し
自分を退け、悔い改めます。」（ヨブ 42：6）

『ヨブ記』のこの結末は、何を意味するのであろうか。これについてもさまざまな解釈がある⁽²⁷⁾。確実に言えるのは、ここで自然界の森羅万象の創造と支配に示された神の偉大さと力が賛美されているということであり（反問における繰り返される「誰が……したのか」への答えは、明らかに「神」である）、しかも、それが人間の卑小さや無力さと対比されているということである（繰り返される「お前は……したことがあるか」、「お前に……できるか」への答えは、明らかに「否」である）。そのうえ、ここで上げられた自然現象は、空の上、地の果て、海の底など、いずれも（少なくとも当時の人々にとっては）知も理解も及ばない領域の事柄であり、人間の力ではどうしようもないものばかりである。後半に挙げられる動物たちのほとんども、人間が飼い馴らす家畜ではなく、人間とはまったく関係なく生きている野性の動物たちである。人間は彼らの生態の意味を理解することはできない。それにもかかわらず、それらの現象や動物たちは、人間がいるかいないかにはまったく関わりなく、そこに存在する。そしてそれらもまた、神によって創造され、支配されている（「お前を造ったわたしはこの獣をも造った」、ヨブ40：15）。それがなぜなのか、何のためなのか、人間にはまったく理解できない。人間は、それらと並んであるちっぽけな被造物の一つにすぎないのである。神がもっぱら人間だけに関心を寄せているなどと考えるのは、人間の傲慢にすぎないのではないか。

応報主義者である友人たちは、災いが下ったからにはヨブが何らかの罪を犯したにちがいない、と推測する。しかし、これに対して、自分は潔白なのだから、災いを下した神は不当だ、と主張するヨブ自身もまた、実は、やはり応報の論理に縛られているのである。神は人間のために、必ず応報の原理を貫徹させねばならないのであろうか。もしそうであれば、人間の必要性や欲求に神が従わされることになる。人が、神が自分に恵みや救いを与えてくれるがゆえに神を崇拜するのであれば、それはやはり或る種の自己中心的な御利益宗教に他ならないのではないか。（ヨブ記冒頭のサタンの挑戦の言葉、「ヨブが、ゆえなく神を敬うでしょうか」[ヨブ1：9]を参照）。そうではなく、人間は自然を通じて示された、人間の理解も想像力も絶した神の力と支配（これを「経綸」という）を無条件で受け入れ、おのれの利害には関係なく、幸も不幸も越えて、純粋

に神が神であるがゆえにその神を崇拜するべきである。ヨブ詩人はこのように主張しているように思われる。そして実は、そのような思想は、『ヨブ記』でヨブが最初に語る言葉の中にすでに暗示されていたのである。

「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(ヨブ1:21)

V. おわりに

嵐の中からの神の言葉には、自然の神秘を通じて、オットーの言う「絶対他者」としての神が再発見されていると言ってもよいであろう。ヨブはそれに直面し、被造物としての自分の卑小さを自覚し、自分の求める神ではなく、自由な創造者にして支配者であるところの神を全面的に受け入れたのである。ことによると、ここには、旧約聖書自体の中にある、(神の似姿としての人間の観念に示されたような)人間中心的な自然観に対する意図的な批判的対決が試みられているのかもしれない。

こうして、われわれは再び、最初に論じた「神の被造物としての自然と人間」というテーマに引き戻される。いずれにしても、ヨブ記の結末は、「神と等しい者」になろうという欲望を持ちがちな人間に対して、自分があくまで被造物の一つであり、決して世界の本当の所有者でも支配者でもないことを忘れないように警告し、また、自然界には人間の理解も統御も越えたものがあることを常に思い起こす、謙虚さを教えているように思われる。同時にそれは、自然に対する畏怖と生き生きとした驚嘆の念を失うことのないように、という呼びかけであるとも言えるであろう。他方で、旧約聖書における「神の似姿としての人間」の観念は、人間が単に自然の支配者であるばかりでなく、神の創造した「はなはだ良い」世界を守るべき責任を負わされた存在であることを明らかにしてくれる。そして旧約聖書のさまざまな箇所に見られる天変地異や自然の災害についての記述は、人間が常に自然との共生関係にあり、人間の恣意的な行為が単に人間自身だけでなく、自然にも破局的な作用を及ぼすことを思い出させてくれるのである。

このように、旧約聖書における自然と人間の関係の理解には、実に多

様な側面がある。そしてそれらは、それぞれ独自の視点から、自然と人間をめぐるさまざまな問題を照らし出しているのである。古代イスラエル人とはまったく異なる時代、自然環境、精神風土、世界観のもとに育った現代のわれわれにとっても、それらが示唆するところは決して少なくないと言えるであろう。

[注]

- (1) 例えば、最もよく読まれてきたゲルハルト・フォン・ラートの『旧約聖書神学』（2巻、1957/1960、邦訳は荒井章三訳、日本基督教団出版局）は、救済史に定位しているため、自然の問題は独立した項目としてはまったく扱われていない。まとまった旧約神学としては現時点で最も新しい、ホルスト・ディートリヒ・プロイスの *Theologie des Alten Testaments*（2巻、1991/1992）も、イスラエルの選びに焦点を合わせたもので、自然の問題にほとんど触れていない。これに対し、アイヒロットの *Theologie des Alten Testaments*（2巻、1933/1935）はその第2部「神と世界」で宇宙論や創造論、被造物界における人間の位置についての考察に関連して、自然の問題にも立ち入っている。ただし、そのためその記述は、アイヒロットの旧約神学の骨組みである「契約神学」の枠組みから外れてしまっている。フォン・ラートの救済史一辺倒の旧約神学を批判し、旧約聖書の神観に、救済する歴史の神と、創造し祝福する神の両側面があることを強調したクラウス・ヴェスターマンの *Theologie des Alten Testaments in Grundzügen*（1978）は、当然ながら、第3部の「祝福する神と創造」で自然の問題にも触れている。
- (2) 引用は原則として新共同訳聖書による。なお聖書文書の略語も、新共同訳の目次の方式に従う。
- (3) 旧約聖書の自然観や、その現代の状況との関連については、すでにいくつかの優れた研究が発表されている。本研究は以下のものから多くの示唆を受けた。J. L. McKenzie, *God and Nature in the Old Testament*, *Catholic Biblical Quarterly* 14, 1952, pp.18-39, 124-145; S. Herrmann, *Die Naturlehre des Schöpfungsberichtes*, *Theologische Literaturzeitung* 86 (1961), pp.413-424; O. H. Steck, *Welt und Umwelt* (1978); K. Koch, *The Old Testament View of Nature*, *Anticipation* 25 (1979), 47-52; B. W. Anderson, *Creation and Ecol-*

ogy, *American Journal of Theology and Philosophy* 1 (1983), pp.14-30; H. D. Preuß, Biblisch-theologische Erwägungen eines Alttestamentlers zum Problemkreis Ökologie, *Theologische Zeitschrift* 39 (1983), pp.68-101; T. Hiebert, The Yahwist's Landscape. Nature and Religion in Early Israel, 1996; W・ツィンマリ『旧約聖書の世界観』(原著初版 1971, 山我哲雄訳, 教文館), G・リートケ『生態学的破局とキリスト教—魚の腹の中で』(原著初版 1979, 安田治夫訳, 新教出版社); 並木浩一『旧約聖書の自然観』(上智大学中世思想研究所編『古代の自然観』1989, pp.149-176); 柏井宣夫『旧約聖書における創造と救い』(1990, 日本基督教団出版局); 樋口進『創造と自然』(木田献一／荒井献編『現代聖書講座 第3巻 聖書の思想と現代』1996, pp.19-41)。

- (4) 自然や環境という主題が、現代の神学における最重要課題の一つであることは言うまでもない。E. von Weizsäcker (Hg.), *Humanökologie und Umweltschutz*, 1972; H. Aichelin/G. Liedke (Hg.), *Naturwissenschaft und Theologie*, 1974; H. Montefiore (ed.), *Man and Nature*, 1975; K. M. Meyer-Abich (Hg.), *Frieden mit der Natur*, 1979; Ch. Link, *Die Welt als Gleichnis*, *Studien zum Problem der Natürlichen Theologie*, 1982; H. Graf Reventlow, *Hauptprobleme der alttestamentlichen Theologie im 20. Jahrhundert*, 1982, 148-168; J. Moltmann (Hg.), *Versöhnung mit der Natur?*, 1986; G. Altner (Hg.), *Ökologische Theologie. Perspektiven zur Orientierung*, 1989; B. Irrgang, *Christliche Umweltethik*, 1992; J・モルトマン『創造における神』(原著初版 1985, 沖野政弘訳, 新教出版社); 富坂キリスト教センター編『エコロジーとキリスト教』(1993, 新教出版社); 安田治夫『自然の神学』(熊澤義宣／野呂芳男編『総説 現代神学』1995, 日本基督教団出版局, 245-26), 等を参照。
- (5) 和辻哲郎『風土—人間学的考察』(初版 1935, 岩波書店)。なお, 鈴木秀夫『超越者と風土』(1976, 大明堂); 飯沼二郎『歴史のなかの風土』(1979, 日本評論社)をも参照。
- (6) コヘレトが語の厳密な意味におけるニヒリストであることを論証したものとして, 関根清三『ニヒリストとしてのコーヘレス』(同『旧約における超越と象徴』1994, pp.115-164)を参照。
- (7) これについては, 諸注解書(特に C. Westermann, *Gnesis Kapitel 1-11, BK I/1*, 1974, 302-306)の他, 特に James Barr, *The Garden of*

- Eden and the Hope of Immortality, 1992. を参照。
- (8) 旧約聖書における偶像否定についての詳しい研究としては, Ch. Do-
hmen, Das Bilderverbot, 1985. を参照。ドーマンは、偶像禁止の習慣
の淵源をイスラエルの祖先である(半)遊牧民の宗教に求め、他方で
偶像禁止規定(第2戒)は他神崇拜の禁止(第1戒)から派生したと
考えている。
- (9) このような考え方の先駆は、IIマカバイ7:28, ロマ4:17に見られ
る。ただし、厳密な意味での「無からの創造」の教理は、初期キリス
ト教がグノーシス主義や異端思想との対決を通じて形成していったも
のである。G. May, Schöpfung aus dem Nicht, 1978. を参照。
- (10) 創世記1章のいわゆる祭司文書の創造物語については、諸注解書の
ほか、Werner H. Schmidt, Die Schöpfungsgeschichte der Priesters-
chrift, 3. Aufl., 1973; O. H. Steck, Der Schöpfungsbericht der Pries-
terschrift, 2. Aufl., 1981; E. Zenger, Gottes Bogen in den Wolken,
1983; C・ヴェスターマン『創造』(原著初版1971, 西山健路訳, 新教
出版社); W・ツィンマリ『旧約聖書の世界観』[注(3)]; H・P・サン
トマイア「創世記の天地創造物語の再見」『インタープリテーション
14』1992, 56-80); 吉田泰「旧約聖書祭司文書の創造物語」(月本昭男
編『創成神話の研究』1996, リトン, 61-154.)等を参照。また創造以
前の混沌と秩序づけとしての創造の問題については、特に、M. Bauks,
Die Welt am Anfang, 1997. を参照
- (11) 旧約聖書の世界観のこの点を特に強調したものが、W・ツィンマリ
『旧約聖書の世界観』[注(3)]である。
- (12) 19世紀から現在までの聖書学における「神の似姿」の概念につい
ての解釈を研究史的にまとめたものとして、G. A. Jónsson, The Image
of God, 1988. を参照。なお、それ以降の議論として、J. Ebach, Bild
Gottes und Schrecken der Tiere. in: Ebach, Ursprung und Ziel.
Erinnerte Zukunft und erhoffte Vergangenheit, 1986, pp.16-47; J.
Scharbert, Der Mensch als Ebenbild Gottes in neueren Auslegung
von Gen 1, 26, in: W. Bauer (Hg.), Weisheit Gottes, Weisheit der
Welt, Bd. I, 1987, pp.241-258; J. A. Soggin, » Imago Dei «— Neue
Überlegungen zu Gen 1, 26f, in: M. Oeming/A. Graupner (Hg.),
Altes Testament und christliche Verkündigung, 1987, pp.385-389;
W. Groß, Die Gottebenbildlichkeit des Menschen nach Gen 1, 26.
27 in der Diskussion des Letzten Jahrzehnts, *Biblische Notizen* 68,

1993, pp. 35-48. 等を参照。邦語文献としては、W・H・シュミット『歴史における旧約聖書の信仰』（翻訳は1982年の原著第4版による。山我哲雄訳，新地書房，393-402）；野本真也「神の像としての人間」（『キリスト教研究 40』1977），pp.77-99；吉田 [注⑩] pp.105-120.）等を参照。

- (13) この点を特に強調したものとして、H. Gunkel, *Genesis, Handkommentar zum Alten Testament*, 3. Aufl., 1917; P. Humbert, *Etudes sur le récit du paradis et de la chute dans la Genèse*, 1940; L. Köhler, *Die Grundstelle der Imago-Dei-Lehre*, *Theologische Zeitschrift* 4, 1948, pp.16-22. を参照。
- (14) この点を特に強調したものとして、H. Groß, *Die Gottebenbildlichkeit des Menschen im Kontext der Priesterschrift*, *Theologische Quartalschrift* 161, 1981, pp.144-264; H・リングレン『イスラエル宗教史』（原著初版1963，荒井章三訳，教文館，pp.142-144），H・W ヴォルフ『旧約聖書の人間論』（原著初版1973，大串元亮訳，日本基督教団出版局，pp.317-328）；G・フォン・ラート『創世記』（翻訳は1972年の第10版による。山我哲雄訳，ATD・NTD 聖書註刊行会，pp.81-82）；同『旧約聖書神学 I』 [注⑪] pp.199-202；R・W・クライン『バビロン捕囚とイスラエル』（原著初版1979，山我哲雄訳，リトン，pp.209-211.）等を参照。なお，注⑫に挙げた研究史的著作の著者ヨンソンは，この点に関して，「もし，バーやヴェスターマンのような少数の影響ある旧約学者がこの支配的な理解に反対していなければ，この問題については旧約学者たちの間に完璧な合意が成立していると言えるところなのだが……」と評している（同書 p.219）。
- (15) 例えば，リン・ホワイト『機械と神』（原著初版1968，青木靖三訳，みすず書房）。なお，この書物の原題は，無理な解決法を意味する成句「機械仕掛けの神（*deus ex machina*）」を逆にした「神から出た機械（*Machina ex Deo*）」である。他に，C. Amery, *Das Ende der Vorsehung. Die Gnadelosen Folgen der Christentums*, 1972. をも参照。これに対するキリスト教界からの反応として，J. Barr, *Man and Nature-The Ecological Controversy and the Old Testament*, *Bulletin of John Rylands University Library of Manchester* 55 (1972) pp. 9-32; U. Krolzik, *Umweltkriese-Folge des Christentums?*, 1979; K. Koch, *Gestaltet die Erde, doch heget Das Leben!*, in: H. -G. Geyer et. al. (Hg.), *Wenn nicht jetzt, wann dann?*, 1983, 23-36; H. J. Münk,

- Umweltkrise-Folge und Erbe des Christentums?, *Jahrbuch für christliche Sozialwissenschaften* 28, 1987, 133-205; G. Liedke, Geschaffen in sieben Tagen. Gen 1-gehört in der ökologische Krise, in: R. Albertz, et. al. (Hg.), *Schöpfung und Befreiung*, 1989, 13-24. リートケ [注(3)], 月本昭男『創世記 I』(日本基督教団出版局, 1996) pp.73-76, 等を参照。
- (16) 月本昭男 [注(5)] pp.74, 90-93] は, 2:15 の通常「耕す」と訳される動詞「アード」が, 語源に遡れば「奉仕する／～の奴隷として働く」の意味を持つことを指摘し, この部分をあえて(人が地に)「仕え, これを守る」と訳している。サントマイア [注(10)] pp.71-72 をも参照。
- (17) バー [注(5)], ローフィンク (N. Lofink, *Macht euch die Erde untertan?*, *Orientierung* 38, 1974, pp. 137-142.), コッホ [注(5)], ツェンガー [注(10), pp.84-96] は, 1:28 の通常(地を)「支配せよ」と訳される動詞「ラダー」を言語学的に検討し, そこに暴力的な支配の意味はなく, むしろ羊飼いが家畜の世話をし, 導く配慮, 育成の意味があるとした。吉田 [注(10), pp.120-128] はさらに一步を進め, 1:28 の二つの動詞を, (地を)「生かせ」(カーバシュ), (生けるものすべて)「共生せよ」の意味に解するように提案している。もちろん, このような解釈に対し, それが護教的にすぎるといふ批判もある。Ebach [注(12)]; Ch. Uehlinger, *Vom dominium terrae zu einem Ethos der Selbstbeschränkung?*, *Bibel und Liturgie* 64, 1991, 59-74; B. Janowski, *Herrschaft über Tiere*, G. Braulik et. al. (Hg.), *Biblische Theologie und gesellschaftlicher Wandel*, 1993, 183-198. 等を参照。
- (18) フォン・ラート [注(14)] pp.207-208; Westermann [注(7)] pp.582-583. 等を参照。
- (19) リートケ [注(3)] が, この問題を正面から扱っている。
- (20) 古代メソポタミアの洪水伝説との関連性については, 月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』(1996, 岩波書店) の訳と解説を参照。
- (21) フォン・ラート [注(14)] p.84; Westermann [注(7)] pp.619-620; Schmidt [注(10)] pp.149-154. 等を参照。
- (22) 旧約聖書における神顕現描写の様式とその歴史的発展については, J. Jeremias, *Theophanie*, 2. Aufl., 1977. を参照。イエレミアスは神顕現の表象をヤハウエの到来と自然の震撼に分け, 後者を周辺世界の影響に帰している。

- (23) Th. ボーマン『ヘブライ人の知恵とギリシヤ人の知恵』(植田重雄訳, 新教出版社, p.282)。
- (24) R・オットー『聖なるもの』(山谷省吾訳, 岩波文庫)
- (25) 新共同訳のヨブ1:9では「利益もないのに」。ただし原語の「ヒンナム」は、むしろ「故なく」、「必要もないのに」といったほどの意味で、ヨブ2:3の「理由もなく」と同じ語である。
- (26) 例えば日本聖書協会口語訳(1951)。なお、日本聖書刊行会新改訳(1973)はベヘモートのみを「かば」と訳し、「レビヤタン」はそのままカタカナで表記する。
- (27) ヨブ記の締め括りをなす神の語りの含む諸問題とその解釈については、諸注解書(特に G. Fohrer, *Das Buch Hiob*, 1963; E. M. Good, *In Turns of Tempest*, 1990)の他、O. Keel, *Jahwes Entgegnung an Ijob*, 1978; V. Kubina, *Die Gottesreden im Buche Hiob*, 1979; J. van Oorschot, *Gott als Grenze*, 1987; H. P. Müller, *Gottes Antwort an Ijob und Das Recht religiöser Wahrheit*, *Biblische Zeitschrift* 32, 1988, 210-231. 等を参照。
- (28) オットー [注②④] pp.131-135. 「私たちは、驚異の要素が荘厳なるものと結びついて、類のないほど純粹に現れているのを、ヨブ 38 章において再び見る。この章は多分、宗教史全体の中で、もっとも注目すべきものの一つである。「その根底において、この章は、合理的概念をもって汲み尽くせないある『絶対他者』の上に立っている。すなわちあらゆる概念、したがってまた目的概念に超絶している絶対の不可思議、純非合理的形相の秘義、しかも驚異ならびに背理としての秘義の上に、双脚を踏みしめている」。オットーのこの記述は、今でもなお、ヨブ記のこの部分に対する最も優れた「注解」の一つであるように思われる。